



FUJI WOMEN'S UNIVERSITY

No.59

Jan.20, 2015

# 藤

藤女子大学  
広 報

カルチェリ P5

聖ペトロ大聖堂クーボラからの眺め P5

テュイネ村教会のマリア像 P5



## CONTENTS

- 「外国語教育研究センター」の設立／3
- 「いじめと向き合う～意識改革～」講演会・シンポジウムを開催／4
- ASEACCU国際会議2014 in フィリピン／6
- 新シリーズ 素顔の先生／11 ●新シリーズ 藤のルーツ／12

# 巻頭 言



## face-to-face

副学長 藤井 義博



アテネオ・デ・ダバオ大学長(右)と共に

人間関係で大切だけれどむつかしいのは向かい合うことです。この8月下旬に4日間にわたって開催されたアジアカトリック大学連盟 (ASEACCU) 国際会議で経験した face-to-face すなわち向かい合うことについて語りたいと思います。この国際会議は英語を共通言語として、主催大学が決めるテーマのもとに毎年異なる国で開催されています。今年の第22回目の会議は、「社会正義のためのカトリック高等教育」をテーマに、フィリピンのミンダナオ島ダバオ市にあるアテネオ・デ・ダバオ大学で開催されました。8か国からの教職員91名と学生約80名が、それぞれ教職員プログラムと学生プログラムに参加しました。本学から参加した2名の学生による報告が本号に掲載されています。

基調講演、パネルディスカッション、ミサ、文化的プレゼンテーション、総会などからなる教職員プログラムの最終日には、参加者全員がどれかひとつを選んで参加する3つのワークショップが同時開催され、私は「共通の善の追求」のワークショップを選択しました。参加者は10名あまりと少人数でしたが、司会者、学生による書記に加えて、アテネオ・デ・ダバオ大学長がファシリテーター（討論の促進役）として参加されました。ワークショップは、順番に自己紹介することから始まり、私の番には次のように述べました。「私は日本の藤女子大学の藤井と云います。副学長をしています。私は内科医師でもあり、大学では学生の健康教育などの授業も担当しています。そこでこのワークショップには付添い医師として参加したいと思います。」すると大爆笑が起こり、思いのほかのアイスブレイク（緊張緩和）になりました。

ワークショップでは、参加者がそれぞれの具体的な取り組み事例などを報告し、またアテネオの学長による共通の善を追求する意義など2回にわたるタイムリーなコメ

ントにより、話し合いのポイントが明確になったのが印象的でした。「共通の善の追求」といっても社会制度の発展途上にある東南アジアの国々とそれが整備されている日本とでは、課題の温度差を痛感していました。しかしどこであれその追求には向かい合うことが欠かせないと考えていました。ワークショップの終盤にコメントを求められたときにはブロークンイングリッシュにて次の内容を述べました。「医療技術が高度に発展した日本では、患者は種々の検査データに還元されています。診療において医師は患者と向き合わずにコンピューターと向き合っています。日本の医師にとって目の前にいる患者は蒸発していて、その代わりに患者データの蓄積に向き合っています。これは本当の臨床医学ではないと思います。そのことを授業では学生たちに伝えています。臨床医学は患者と医者との face-to-face から始まる必要があります。」

このコメントに、参加者から無音の拍手が送られたり、“Thank you for your comment.”と握手を求められたりしました。その後ツアーに出かけたバスの中では「ドクターと一緒にだから大丈夫だよ!」とバスのみんなに冗談が飛んだりしていました。お別れの晩餐会で、アテネオの学長に「我々を導いていただき本当にありがとうございます。」と本心からの言葉を述べたところ、満面の笑みにて喜ばれ、“Data is a good point.”とワークショップでの私のコメントに共感の言葉をいただけたことが何よりうれしいことでした。

向かい合うことは、言葉遣いの上手とか下手とかではないと思います。相手を大切にしながら本心で感じたことを述べる時、お互いに相手の本当の気持ちに触れ合うときには、これが大切な態度になります。そして教職員と学生の face-to-face は本学における教育の大切な柱になっております。



# 「外国語教育研究センター」 の設立

外国語教育研究センター センター長 新井 良夫



「国際化」という言葉がよく使われていた日本であったが、最近「グローバル化」がそれに代わりつつある。国際化（インターナショナル）というのは、国と国との関係が強調されるように感じるが、グローバル化はまさに自分と全世界との関係と言えるのではないだろうか。

誰でもが世界中と瞬時に関係も持つことが当たり前になりつつある社会、そのような時代の到来である。ではどのように、どの言葉でコミュニケーションをとるのか。英語が世界唯一の共通語だとよく耳にするが、必ずしもそうとは言い切れない。EU諸国では、自分の母語以外に2つの外国語をある程度使えるようにする、という「多言語政策」をとっている。

本学の外国語教育は、学部別の委員会で運営されてきたが、全学的に共通の考え方と方法で展開するために、この度「外国語教育研究センター」を設立して活動を始めつつある。昨年10月に発足し、まずカリキュラムの見直しを行い、2015年4月から新たに展開してゆくことになった。

本学の教育目的の一つは、「自己と他者の人間性をかけがいのないものと認め、近隣、地域社会、国などの立場を尊重しつつ、地域社会の諸問題に取り組むと共に、国際意識を育て、世界の平和を願い、人類社会の一員と

しての責任を果たす人材を育成する」である。これに応えるために、本学の外国語科目である、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語のカリキュラムを新しくして踏みだそうというのである。

今年10月には、センター設立を記念して、公開講演会「“真のグローバル・イングリッシュ”とは？」を開催した。上智大学言語教育研究センター長の吉田研作先生をお招きして、講演会とワークショップを開催した。日本人の英語力、英語教育改革の必要性、何ができるかという意識改革などの諸問題が論じられた。また、ワークショップでは、大学での英語教育のアプローチとして、「CLIL（内容言語統合型学習）」の可能性を探る実践報告や意見交換などが行われた。

本学のセンター設立に関して、アドバイスを受けていたこともあり、今回、吉田先生の講演ということにさせていただいた。本学の外国語教育を進めていくにあたっては、本学にふさわしい内容を模索していく必要があるが、今後も更に研究を推進していく必要があると思っている。





文化総合学科 教授 太田 眞

# 「いじめと向き合う ～意識改革～」

## 講演会・シンポジウムを開催

2014年4月に「北海道いじめ防止等に関する条例」が施行された。市町村や学校では同条例の趣旨を踏まえ、見直しはもちろんのことその指導体制の整備・強化が求められている。

今この時期に、「大津市立中学校におけるいじめに関する第三者調査委員会」の委員長を務めた大阪弁護士会弁護士の横山 巖氏の講演をとおして、大津市で起きた事件をもう一度想起し、学校の今を見つめ直す機会としたい。

さらに、本音で意見交換したり、知恵を出し合ったりして、子どもたちの明日を拓くための教育について共に考える場とすることをねらいとし、7月19日(土)に講演会・シンポジウムを開催した。

横山氏は講演の中で、「いじめは、いつでも、どこでも、だれにでも起こること。いじめが存在していることを否定し、その存在が隠されてしまうことこそ最も恐れるべきこと」と訴えた。また、いじめは子どもの関係性の中で生じている。見えなくなっているいじめについては、生徒自身の力で解決していくことが極めて大事であると述べた。

シンポジウムでは、横山氏のほか、道教育庁主幹の佐藤裕之氏、足寄高校長の西堀隆亮氏、元札幌白陵高校PTA会長の鎌倉真智栄氏の4人が登壇。本学文学部長の石田晴男氏(前札幌市立新琴似北中PTA会長)がコーディネーターを務めた。

議論の中で、西堀氏は新任校長として現任校で取り組んでいることなどを紹介。条例ができたことで、学校では組織として取り組むことが一層重要になったことを強調した。

鎌倉氏は、自身の子育ての中でいじめの体験があり、その際の学校の対応を思うと、「教師は少し構え過ぎでは。先生方がちょっと変だと感じたときには、子どもの体や心の変化を正面から受け止めてほしい」など教師に期待した。

佐藤氏はいじめ問題について、事実関係を明確にしながら組織で対応することや自尊感情や自己有用感を育てる教育活動を充実することなどを各学校に要請した。

最後に横山氏は、改めて学校と保護者・地域社会との連携の重要性を認識したと述べ、「大津市立中学校のいじめにかかる報告書全文をぜひ自分のこととして読み、何かを感じ取っていただきたい」と参加者に期待した。

参加者からは、「久しぶりに来てよかったと思える講演会・シンポジウムだった。身を引き締めこれからも日々生徒に対応していきたい」「現場にかかわる人々の声が聞けて、本当によかった。講師の先生やパネラーの皆さん、藤女子大学の教職員や学生の皆様に感謝する」などの感想が寄せられた。





## 藤のルーツを学ぶ旅

教務課  
柳本 睦子

永田理事長を団長とした学園教職員7名、同窓生7名、計15名は、2014年8月21日から30日の10日間の日程でイタリアへと出発しました。

今回の行程は、フランシスコ会の原点であるアシジ、カトリック総本山のバチカン、ローマ、そして修道会本部のあるドイツでした。

世界遺産でもあるアシジは、1997年のウンブリア・マルケ地震後、多くのボランティアにより再建され、どこにカメラを向けても美しい景色が印象的でした。3日間の滞在で、聖フランシスコ大聖堂をはじめ、聖フランシスコ所縁の場所を巡礼しました。その中でも、特にカルチェリには深く感銘を受けました。日本の山寺を連想したのですが、よくもこんなところに建てたと思うとともに、今も修練のため修道士が訪れていることに驚き、聖フランシスコの意思がどれほど強いものであったかが感じられました。

サンタ・キアラ教会のミサに与ることができ、シスター達の透き通った歌声に感動し、「パーチェ」(平和の意)と言いながらミサに参加している方々と笑顔で握手を交わす行為に喜びを覚えました。

ローマでは、アシジとは反対に都会的な街並みが印象的でした。聖ペトロ大聖堂では、教皇のスピーチを広場で直に拝聴し、キューボラからローマ市内を眺め、滅多に入ることの出来ないネクロポリス(地下墓地)をバチカン専門職員の方の熱心な解説付きで見学し、バチカン三昧となったのは、なかなかできない体験だったと思います。現地ガイドの勧めで早朝に見たピンクに染まる聖ペトロ大聖堂は大変美しかったです。

修道会本部のあるテュイネ村は自然に恵まれたところで、村の人々の生活を車窓から垣間見ることが出来

した。

村の何箇所かマリア様の御像がさりげなく置かれていて、修道会本部を中心に村が反映しているように思えました。

修道会本部では、本当に温かいおもてなしをいただきました。宿泊施設は本学のセミナーハウスを思い出させるような使い勝手のよい手作りの家具に行き届いた清掃、清楚で美しいテーブルコーディネート、そして、とてもおいしい食事を提供していただきました。多くのシスター達がどこでも笑顔で迎えてくださり、ミサでは神父様の歓迎の言葉と祝福をいただきました。

本部修道会の医療、福祉、教育に関する活動も拝見することができました。まず、歓迎のおもてなし方が勉強になりました。教育は制度自体が日本の状況とは異なりますが、校舎内の間取りや図書館など、大変興味深いものでした。生徒達の作品を多く展示していることで、その学校のコンセプトが伝わってきました。

医療については、先進医療とともに、人間の尊厳を大事にした緩和ケア、ホスピスの仕組みがかなりしっかりとしていたのは、カトリックの信仰からくる必然なのだろうと感じました。

Sr.クサベラの生家にお伺いすることができ、御子孫からアルバムを見ながら、多くの話を聴くことができたのもよい思い出となりました。学園90周年式典には、来日されるとのことでしたので、さらに楽しみです。

最後にケルン大聖堂に圧倒され、長いようであつという間の旅を終えました。多くの経験と人との出会いの機会を与えていただけたことに心より感謝します。



聖フランシスコ大聖堂の庭の前で



聖フランシスコ大聖堂上堂



St.Raphael 病院でのおもてなし



オスナブリュック大聖堂の回廊

ASEACCU(東南・東アジアカトリック大学連盟)は、日本のほかに、韓国、台湾、タイ、フィリピン、インドネシア、そしてオーストラリアの約60のカトリック大学によって構成され、毎年夏に加盟大学が国際会議を主催し、講演やプレゼンテーションを交えながら参加者が意見を交わす機会となっています。会期中に学生が主体となる学生会議が実施され、その年のテーマについて各国の若者が英語で意見交換をしています。今年度は本学から2名の学生を派遣しました。



文化総合学科2年  
M.C

■ASEACCU国際会議に参加し、各国・地域の学生たちと交流したり、フィリピンの現状を見たりしたことで、日本との違いに驚くとともに、学問に対する意識が変化し、これからの課題や方向性も見つかりました。

まず、Joel E. Tabora神父(アテネオ・デ・ダバオ大学学長)による基調講演にて、今年度のテーマである“Catholic Higher Education for Social Justice”について、社会正義とは真実を求めることであり、そのためには教育が必要不可欠であり、教育はイデオロギーや権威主義、独裁から解放されなければならないというお話を伺い、それを基にグループワークを行いました。その際、貧困や環境問題などの死活問題を抱えるフィリピンの学生たちからは、学習意欲や問題解決に向けた使命感の強さがひしひしと伝わってきて、貧困とはかけ離れた平和な日本で暮らしている私たちは、彼らの姿勢を見習うべきだと強く思いました。グループワークのまとめの際に、私のグループのリーダーであるフィリピンの学生が涙を流しながら話していたことがとても鮮明に記憶に残っています。また、ミンダナオの平和と発展や文化・宗教面からの平和構築についてのパネルディスカッションでは、多くの大学が存在する中で、貧困解決や平和追求、発展に教育はどう貢献できるのかというAlbert Alejo神父(アテネオ・デ・ザンボアンガ大学)から投げかけられた疑問がとても印象的でした。

この他にもミンダナオの少数民族の歴史や文化を学んだり、フィリピンの民謡を聴いたりしたことで、これまであまり強い関心を抱いていなかった地元北海道のアイヌ民族について考える機会ともなったほか、第二次世界大戦期の日本によるミンダナオ侵攻の様子を伺い、日本を外からの視点で見ることができました。また、派遣学生が円になって見守る中、各国の代表学

生が松明を持って中央に集まり、社会正義のために行動し、尽くすことを宣誓した際、日本代表を務めることができ忘れられない思い出となりました。

終盤には、会議を振り返るセッションがあり、異なる文化背景や価値観を持ちながらも、同じ学生という立場で同じ時間を過ごし、意見交換をしたことはとても貴重な経験であり、このような機会を与えていただいたことに感謝していること、また、会議の中で話題となった貧困や地球温暖化について日本は先進国として何ができるのか、そのために私自身は何ができたかを模索することが私にとっての課題となり、帰国後、会議での経験を周囲と共有することで、藤女子大学が何らかのアクションを起こすきっかけを作りたいということ述べました。

会議に参加したことで、私はアジアの一員なのだというのを改めて自覚するとともに、興味関心が欧米諸国だけでなく、アジア諸国にも広がりました。また、遊ぶときは思いきり遊び、会議のときにはしっかりした意見を持ち、真剣に取り組むフィリピンの学生たちを見て、いつもきらきらと輝き続けているような印象を受け、とても刺激になりました。来年度にはイギリス協定校への長期留学を予定しており、今回学んだことを活かしながら様々なことを経験・吸収してきたいと思います。そして、大学卒業後に世界のどこかで今回の会議参加者らと一緒に働くことを思い描きながら、今後も意欲的に学問に励んでいきたいです。







人間生活学科3年  
K.Y

■今回ASEACCU国際会議に派遣していただき、今年のテーマであるCatholic Higher Education for Social Justiceから多くのことを学んだほか、自らの考えに対する気づきや

この出会いに関して

深く考えることができました。特に高等教育に関して私なりの考えを持つことができるようになったと思います。

会議の中で、「大学の授業は専門的過ぎる面があり、人との繋がりを持つことや自然を尊敬すること、自ら考え経験することなど、新たな発見や気づきの機会が少なくなっている。このため、視野が狭くなり、自分自身の心を大切にすることや心を成長させることができなくなっているのではないか」というお話があり、とても印象的でした。また、グループワークで講演内容等について意見交換をした際、それぞれ異なる出自・文化背景であるのにも関わらず、似たような考えを持っていることに大変驚かされたと同時に、基本的な考えは似ていても、それを具体的にどのように活かしていきたいかという点では、それぞれの国や文化が深く関わっていたように感じました。

市内見学の際にも講演や説明を伺う機会があったのですが、中でも印象深かったのは、イスラム教徒の方のお話です。「どうしたら平和になると思いますか」という問いに対し、「しっかりと話し合うこと」と回答されていて、とてもシンプルな内容に驚きました。しかし、よく考えてみるとそれぞれに自分たちの信じるもののみを追い求めている人同士が解りあうことは難しいことなのかもしれません。

様々な話を聞き、日本の教育には、教科書を読んで勉強をすることだけではなく、意識的に心の教育に取り組むことも必要なのではないかと感じました。今日の日本では、いじめや虐待、自殺など多くの社会問題

が起きています。自らの考えを他者と共有する機会が少なく、何かを経験して得たものや学んだことがあってもひとりで完結してしまっているのかもしれない。そして、少しずつ考えが偏り、次第に命に関わる問題にまで発展してしまっているのではないかと。また、教育は時代と共に変化することも必要なのではないかと。机上で学ぶものだけではなく、他者との意見交換や、考える力を養うことができるような機会を増やし、心の教育を提供することが大切なのではないかと考えました。

今回たくさんの国や地域の学生や現地の方と交流し、日本の文化は他国の人々にあまり理解をされていないと感じました。日本には自国の文化を発信することが苦手なのかもしれません。日本には世界に誇る文化がたくさんあるので、もっと堂々と海外に向けて発信するべきだと思います。また、人に理解してもらうためには、まず、伝えることが重要だと思います。教育とは、自分に自信を持てるよう一人ひとりの考えや想いを大切にすることで、自分の力で考え、発信し、意見交換をする力を養う役割もあるのではないのでしょうか。

今後は、この経験を私の中だけに止めるのではなく、多くの人と共有し、意見交換をしていく中で、互いの心をより豊かにするひとつのきっかけになれば幸いです。また、今の私には何ができるかということを見極め、ASEACCUで学んだ気持ちや心の大切さを、人の心に直接訴える機会を作りたいと思います。





# 藤女子大学の国際交流

藤女子大学には、在学中に1年間(2学期間)の海外協定校留学のシステムがあります。留学先は、アメリカ・イギリス・オーストラリア・韓国・台湾にある11の協定校の中から選択します。これまで学科を問わず、多くの学生が留学に参加しました。

## 〈留学の流れ〉

### 1. 出願・学内選考

「実際に留学した先輩に、相談したい…。」  
留学経験者による相談会を実施。  
不安な気持ちにも、先輩ならではの  
親身なアドバイス。



「留学のための奨学金は?」  
協定校留学を対象とした、藤女子大学の  
無利子貸与・給付の奨学金制度(選考あり)。



### 2. 渡航準備

「海外は初めて。不安がいっぱい…。」  
国際交流センターの準備サポートや、  
専門講師を招いての、  
海外危機管理オリエンテーションを企画。



### 3. 留学中

### 4. 帰国後

一定の条件を満たした場合、  
▶海外協定校で修得した単位を、本学の単位として認定。  
▶留学期間を含め、4年間での卒業も可能。  
▶卒業延期を希望する場合は、学費減免制度あり。  
▶留学報告会を実施、在学生や教職員と体験を共有。



海外協定校留学では、語学習得だけでなく、  
大学学部の授業に出席して学ぶことができます。  
留学した学生は、言語学や社会学、ビジネスや  
音楽など、幅広い科目を受講してきています。

寮生活を通じて現地の学生と友情を深め、他国  
の留学生と史跡を訪ねて見聞を広げることも。  
帰国後の学生からは、留学の経験を通じて、未知  
のことにチャレンジする自信がついた、学ぶことに  
さらに積極的になったという声が聞かれます。

留学についてのお問い合わせ 国際交流センター(北16条校舎 3F) TEL/FAX ● 011-736-5912(直通) E-mail ● cep@fujijoshi.ac.jp

## 学内ニュース

2014年6月～12月に下記の行事、講演会等を実施しました。

- ❖ **保育学科特別公開講演会** 6月28日(土)、6月30日(月)  
「生きること・物語ること -イソップ寓話にはじまって」、  
「“絵本”を伝えるということ」 講師：三宅 興子氏(梅花女子大学 名誉教授)
- ❖ **第1回食物栄養学科同窓の集い** 7月5日(土)
- ❖ **キリスト教文化研究所公開講演会** 7月19日(土)  
「聖書に学ぶ -神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか(詩編22)-」  
講師：和田 幹男氏(日本カトリック神学院 大阪教区司祭)
- ❖ **第16回家庭科教育研修講座** 7月27日(日)
- ❖ **日本語・日本文学科特別公開講演会** 9月11日(木)  
「源氏物語」とジェンダー 講師：安藤 徹氏(龍谷大学 文学部 教授)

- ❖ **JICA地域研修プログラム**  
「仏語圏アフリカ乾燥地域村落飲料水管理コース」受入  
9月18日(木)～11月6日(木)
- ❖ **人間生活学部公開講座** 10月11日(土)  
「石狩の子育てを考える -子育て支援ネットワークの広がりこれから-」  
シンポジスト：三浦ひとみ氏(いしかり子育てネット会議議長)、  
坂本 伸子氏(石狩市浜益支所保健師)
- ❖ **文化総合学科公開講演会** 10月19日(日)  
「ケアの倫理と正義の倫理：人間として、豊かな生を求めて」  
講師：勝西 良典氏(本学講師)
- ❖ **慰霊祭** 10月31日(金) 於マリア院聖堂
- ❖ **人間生活学部保護者懇談会** 11月8日(土)

## 訃報



元藤女子大学  
文学部国文学科教授  
藤村 潔 様

平成26年10月8日ご逝去 92歳。昭和18年12月から兵役に服し、昭和25年4月に復員。昭和25年から17年に亘り香川県で高等学校の教諭を務められ、昭和42年から香川県教育委員会指導主事に就任し、昭和44年に退職。その後、昭和44年4月より23年間に亘り藤女子大学教授として学生の指導に尽くされ、平成4年3月退職。先生はご生涯を『源氏物語』研究に注がれました。その精緻なご研究は先生ご自身を語っているように思われます。いくつになっても好奇心と探究心を失わない若々しさと、ユーモアのある批判精神をお持ちでした。





## 未来の自分への「LINK」

藤陽祭実行委員会副委員長  
文化総合学科3年

Y.N

今年度の藤陽祭のテーマは「LINK」。昨年度の50回という節目の年から「これまでの経験を今年や

来年以降も繋げて活かしていこう」という思いが込められていました。

私にとっては、自分が担当している協賛の仕事をしながら、副委員長という補佐の役割も担い、新たな悩みを抱えながらの大学祭だったと感じています。

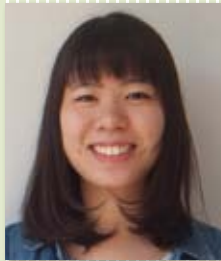
特に重圧と感じていたこととして、委員長を支え、すべての係の仕事を把握しつつみんなが動きやすい空間を作らなければいけない、という点がありました。その中で集団をまとめる大変さや責任に加え、どんな意見であっても聞き入れ参考にすること、その反面、自らも意見を発信することの大切さを学びました。上手くいかないことがあると様々な選択肢が生まれます。そこから今の環

境や活動の中で何が一番重要なのかを考え、判断して選び、責任をもって行動することも身につきました。

女性だけだからこそ大変な面もありましたが、3年間所属した藤陽祭実行委員会の一番の魅力は、何か一つのことを、藤女子大学という女性しかいない空間で作り上げていくことです。女子大ならではの企画や運営をすることが何よりも楽しかったです！

来場されたお客様がどのようにしたら楽しんでいただけるかを第一に考え、かつ運営する側の私たちも楽しんでこそその大学祭であるということを常に大切にしてきました。その甲斐もあって、今年度も、来場された皆様、そして私たち実行委員も楽しめる空間を提供することができたと思っています。

副委員長として、協賛担当として、学内外の様々な方たちと関わったことは、社会勉強という意味でも大きな成果がありました。このことを未来の自分に「繋げ」、女性ならではの視点を大切にするとともに、実行委員として鍛えられた責任感を持って、社会にあっても家庭にあっても、芯の強い女性でありたいと思っています。



## 心をひとつに

藤花祭実行委員会委員長  
保育学科2年

M.M

藤花祭実行委員会に入り2年目となる今回、先輩から委員長を任せたいと言われ正直なところ戸惑いま

した。人前に立つことが苦手で委員長などの経験も無く、更には2年生からは実習が始まり学業が忙しくなることもあり、引き受けるか悩みました。しかし、在学中に何か真剣に取り組み、自分を成長させたいと思い、引き受けることにしました。

引継ぎ後、本格的に仕事が始まってからは何度も困難に直面しました。大学祭を一から作るということは想像以上に大変でした。藤花祭前日は学外での実習と重なり終わり次第大学に戻り準備に参加しました。すると各部門の責任者を中心に2年生は1年生をサポートしつつしっかり引っ張り、1年生は分からないながらも2年生の指示に従い柔軟に対応してくれていました。その姿を

見た私はスタッフのみんなが効率よく動くことが出来るように視野を広げ、的確な指示を出そうとより一層気持ちは引き締め本番に臨みました。後に聞いた話では、私を驚かせようと頑張ったと教えてもらいスタッフに大変感謝しました。

こうして、スタッフ一人ひとりがお互いを思い、助け合い、一生懸命準備できたことは今回のテーマである「FUJI makes you HAPPY!」につなげることができたと思います。

2日間にわたる藤花祭が無事終了し、スタッフみんな嬉し涙を流しながら互いの頑張りを称え、喜びを分かち合いました。学科、学年を超え素敵な仲間を得たことの喜び、様々な不安を抱えながらも委員長としての自覚を持ちやり遂げた経験は、自身の成長にもつながったと思います。この経験を忘れることなく、全体を見る視野を持ってチームワークを大切にする人物になりたいです。



# 大学へのご支援ありがとうございます

藤女子大学の寄付募集活動は、みなさまの温かいご支援により、2012年度からの累計が3,200万円に達しました。寄付募集につきまして深いご理解とご協力を心よりお礼申し上げ、ここに感謝の意を表しご芳名を掲載させていただきます。2014年度のご寄付につきましては、次号の広報「藤」にて、用途等をご報告いたします。

## 寄付者ご芳名 (第5回) 期間 2014年4月1日～ 2014年9月30日 (敬称略・お申込順)

〈保護者〉				〈卒業生〉				〈旧教職員・旧役員〉		〈教職員・役員〉	
奈良 之雅	崎山 賢	芹川 正規	城下 裕二	千葉 啓子	北岡 富弥	匿名 2名					
高村 忠峰	山本 公紀	難波 一夫	吉川 哲也	橋本美智子	田中 彌八	計 2名					
花岡 秀人	清水 整	穴戸 弘	小村 昌弘	阿部 睦子	三浦 良一						
西川 重穂	酒井 俊一	村松 昌宏	小山田英隆		東川 尅美			〈その他、法人等〉			
森岡 基見	石山 茂	葛西 勝之	磯部 修一	匿名 2名				藤の美会			
鶴田 浩久	佐藤 康次	吉田 雅人	今井 明	計 5名	匿名 1名			(株)アイ・ディー・エフ			
田中 克志	長崎 枝実	川崎 繁			計 5名			計 2件			
中島 尚好	加藤 哲佳	紀本 和彦	匿名 29名					計 85件			
日向 正典	三谷 公	川上 雅弘	計 71名					2,883,000円			
渡邊 幹夫	三谷 耕	安藤 敏己									
西村 和信	佐藤 守	吉川 邦夫									
前田 和教	木村 浩士	森岡 康									

2012度実績：377件 12,081,866円  
2013度実績：227件 17,413,757円

2012年4月～2014年9月末までの累計 **689件 32,378,623円**

## ご寄付のお願い

藤女子大学は、財政基盤をより強化して教育研究環境の整備と学生支援体制のさらなる充実を図り、創立の精神に基づいて女性の育成に努めてまいります。今後とも、ご支援をいただければ幸いです。

### 【募資金額】

個人……………1口1万円 (なるべく2口以上のご協力をお願いしておりますが、金額にかかわらず有り難くお受けいたします)  
法人・団体……金額は特に定めておりませんが、格別のご協力をお願いいたします。

### 【お申込み・払込み方法】

寄付申込書をご送付の後、お近くの郵便局・銀行から下記口座宛にお振り込みください。なお、本学専用の払込用紙で郵便局から払込手続きをされますと、手数料は無料になります。寄付申込書・払込用紙等をご入り用の際は、本学寄付金募集窓口にご連絡ください。

郵便局 振替口座 02780-7-50398 藤女子大学

銀行 北洋銀行 北七条支店 (普) 3989004 藤女子大学 募金口

北海道銀行 札幌駅北口支店 (普) 1185721 藤女子大学 募金口

三菱東京UFJ銀行 札幌支店 (普) 4021677 学) 藤学園 藤女子大学

### 【記念品について】

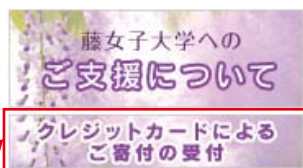
1回につき2口以上ご寄付をいただいた方には、「藤」の名を入れた記念品を贈呈いたします。

### 【税制上の優遇措置】

藤女子大学へのご寄付につきまして、「所得控除」制度か、「税額控除」制度のどちらかの適用を受けることができます。税額控除制度では、所得税率に関係なく寄付金の約40%が所得税額から直接控除されます。(ただし所得税額の25%が限度)確定申告の際に、寄付者ご自身においてどちらか一方の制度をご選択ください。

### 【クレジットカードによるご寄付】

インターネットからのクレジットカード決済もご利用いただけます。  
本学ホームページのトップ画面右側「クレジットカードによるご寄付の受付」バナーよりお手続きください。



会計課寄付金募集窓口

TEL : 011-736-5044 FAX : 011-736-5230

E-mail : kaikei@fujijoshi.ac.jp URL : http://www.fujijoshi.ac.jp



# 素顔の先生 第1回

文学部 文化総合学科 教授

大矢 一人 先生



新シリーズ「素顔の先生」の1回目は、本学で主に教職課程を担当なさっている、大矢 一人先生の新たな一面を発見したいと思ひました。普段は、授業以外の話を聞くことがあまりないため、私たちも楽しくインタビューをさせていただきました。先生が私たちと同じ大学生時代はどう過ごしていたのか、教壇から離れた話を聞いてみました。

## Q1. 大矢先生は、中学・高校の先生ではなく、なぜ大学の先生になったのでしょうか。

中学生だった頃、教育の啓蒙書に出会った。その本の作者である遠山 啓は、ある日、お孫さんと算数について話をしていた時に、小学校の教科書を見せてもらった。作者はそれを見て、「学校は子供たちに教えるべきことをきちんと教えていない!」と気づきショックを受け、自分が数学教育について考えようと決めた(遠山 啓は東京工業大の数学の教授だった)。若かりし頃の大矢少年は、その本に出会い、感動したと同時に、自分も教育学について勉強してみたいと心に決めた。

自分は高校生の頃、不整脈を患っており、毎週病院に通っていたため、十分に数学の授業を受けることが出来なかった。一年の浪人時代を経て、教育に関して歴史のある広島大学へ進み、中学生の頃から勉強したかった学問を学ぶことが出来るようになった。教育実習では、小学校など様々な校種で実習を行ったが、やはり自分は教育について極めていきたい、と再確認した(先生は、占領期の教育史が専門)。人との出会いや縁により、自分は大学の先生になることが出来たと思う。

## Q2. 先生は、どのようなキャンパスライフを過ごしましたか。

(自分の学科は)35人程の少人数であり、すぐに居心地の良い居場所を見つけることが出来た。また、全国各地の山を登る、山登りサークルに所属していたため、毎日授業が終わるとミーティングに参加し、週末は友人・先輩たちとキャンプや飲み会を開き、楽しい学生生活を送った。今でも、その頃の友人たちとは親交がある。

大学生活は、勉強だけではなく、人との出会い、山登りの楽しさを追求した4年間でもあった。

## Q3. 自身の経験を振り返り、学生時代にしておくべきだったことは何ですか。

勉強である(笑)。自分は、サークルに精を出していたため、お世辞にも真面目な優等生とは言えなかった。時代も関係したのであろうが、授業はきちんと毎回出席するべきだったと思う。自分の専門分野は本を読み、自主勉強会にも参加していたが、興味のない分野は全く勉強しなかった(笑)。

## Q4. 先生はスポーツなど、何か打ち込んでいることはありますか。

テニスである。32歳で広島から藤に来て少したった時に、当時の教職の先生(当時65歳くらい)に藤の先生たちで行っていたテニスの大会に誘われた。高校校までは、卓球やバドミントンなどしていたし、年齢的にも自分が若かったため、「勝てる!」と思っていたが、見事惨敗した。それ以来、テニスの魅力にはまり、花川キャンパスで妻や大学の先生方などとテニスをしている。

## Q5. 先生の今後の目標は何ですか。

自分は今まで、自分の名前前で本を出したことがない。資料集や共著は出したことはあるが、この歳で一冊も自分の本を出したことがないことは、やはり恥ずかしい。だから、自分の今まで培ったこと、学んだことから一冊の本を作りたい。それが今の自分の目標である。



文学部  
英語文化学科4年  
Y.Y

先生の学生時代を聞いて、「先生も私達と変わらない学生だったんだ」と驚きました。お話の中で、大矢先生が「いろいろな過程があって教員になるのもいいんじゃない」といった言葉が強く印象に残りました。



文学部  
英語文化学科4年  
U.H

いまの私たちと同じように、先生が「学生」だった頃の夢や目標を聞き、知らなかった発見があったりして、とても楽しく有意義な時間でした。同時に、自分の学生生活も振り返るきっかけにもなりました。



文学部  
英語文化学科4年  
T.S

この度は、とても興味深いお話を聞くことができました。先生も若かった頃は、私たちと同じような悩みを持ち、乗り越えて今があるため、私も失敗を恐れず、新しい世界に飛び込んでいこうと思いました。

シリーズ

Fuji's roots  
藤のルーツ

## 第1回 藤の設立母体修道会の始め

理事長 Sr.永田 淑子

藤学園は2015年に創立90周年を迎えます。記念事業の一つとして、2012年から「藤のルーツを学ぶ旅」を行なって、教職員、卒業生などを中心に、藤という学校の原点ともいえるべきところを訪れています。

1920年に北ドイツの寒村テュイネ村にある女子修道会「殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会」から、3人の修道女が札幌に来ました。1907年に札幌に来た宣教師ヴェンセスラウス・キノルド司教様の依頼によって、女子のための学校を始めるためでした。

その当時、札幌には4つの高等女学校がありました。いずれも4年制で、男子の中学校(5年制)の教育より多少レベルが低いと考えられていました。女子の学習意欲は強く、4つの高等女学校では入学しきれないほどの志願者たちがいました。女子に高い教育の機会を与えることによって、北海道の向上を図ろうと考えたのがキノルド司教様でした。

「殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会」という修道会を、簡単にご紹介します。19世紀の半ば、北ドイツのテュイネ村の主任司祭ダル神父様は、南ドイツのストラスブルグ(現在はフランス領のストラスブル)に誕生後間もない修道会から2人の修道女を招いて、当時流行していたチフス患者の看病と子供た

ちの教育の仕事を頼みました。そのうちにストラスブルグがフランス領になり、移動や通信手段の発達していない時代ですから、ストラスブルグとの往来も困難になり、戻ってくるように本部から指示が来ました。しかし、彼女たちがいなくなれば、この病人や子供たちの世話をしてくれる人がいませんでしたので、ダル神父の頼みもあり修道女たちは新しい修道会を作ってそこに留まることにしました。それが1869年のことです。総長となって新しい修道会を導いたのが、最初にテュイネに来た2人のうちの一人、シスター・アンゼルマでした。以後、彼女はムッター(母)・アンゼルマと呼ばれます。



ムッター・アンゼルマ・ボップ  
(1835～1887)



ゲルハルト・ダル神父  
(1788～1874)



### 藤の学生のために

現在、図書館1階に  
ラーニング コモンズ空間を整備中です。



発行 藤女子大学 編集 広報「藤」編集委員会

北16条キャンパス 〒001-0016 札幌市北区北16条西2丁目 TEL (011) 736-0311 FAX (011) 709-8541  
花川キャンパス 〒061-3204 石狩市花川南4条5丁目 TEL (0133) 74-3111 FAX (0133) 74-8344

ホームページアドレス <http://www.fujijoshi.ac.jp>